

## 文化

『竹取物語』のかぐや姫のはなし  
に触れて、本稿の前回(8月2日付)  
では、シンガポールの月にまで、遠く  
思いをめぐらしたのだが、このあ  
たりで一応の切りとしよう。

さて、かぐや姫を天上から迎えに  
来た天人のもたらしたものは、「天  
の羽衣」のほかにもう一つ「不死の  
薬」だったという。「壷なる御薬た  
てまつれ」と言う天人は、なお言葉  
をついで、「地上では」きたない物  
分が悪いことでしょう、と。

姫は、薬を少しなめただけで、結  
局は自身がソデにした帝(みかど)  
への別れの歌に添えて、獻上してし  
まう。

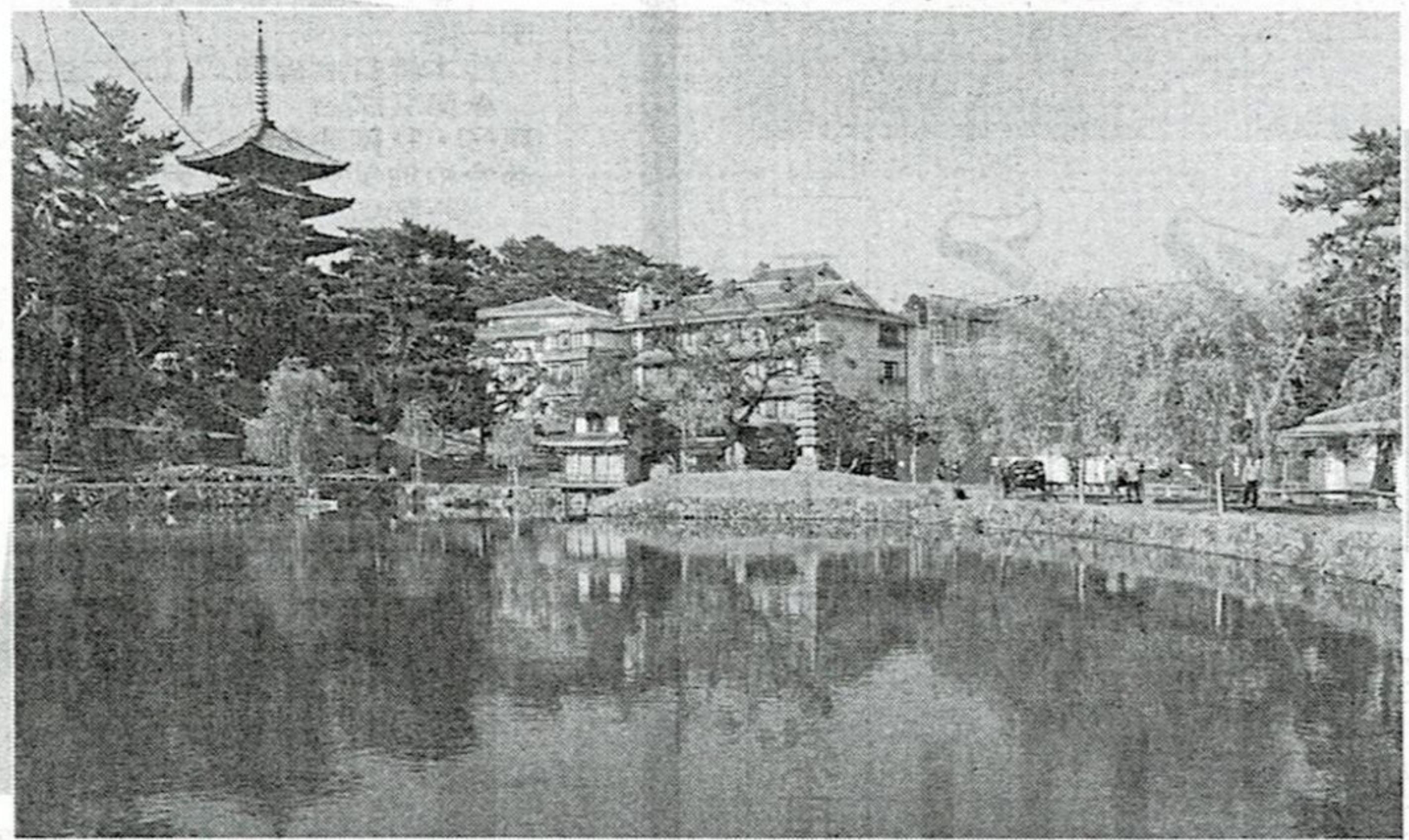
▼「不死の薬」  
『竹取物語』のかぐや姫のはなし  
に触れて、本稿の前回(8月2日付)  
では、シンガポールの月にまで、遠く  
思いをめぐらしたのだが、このあ  
たりで一応の切りとしよう。

月7日付)。奈良に住んだ民俗学者  
の笛谷良造は、「中秋の名月の宵に  
麥若水(をちみづ)と呼ぶ聖水が月  
の世界からやつて来る、という信仰  
が各地に残っているのだ」と言う  
(『神々の世界』)。

また、『万葉集』の巻十三には次  
のようないい歌がある。  
「天橋も長くもがも 高山も高く

## な ら 民俗通信

289 西村 博美



名月の夜に管絃船が浮かべられる猿沢池  
(奈良市、勺櫛子・撮影)

# 人界への秘めた思い 竹取の民俗

かぐや姫のものがたり(その四)

「壷なる御薬たてまつれ」という天  
の羽衣のほかにもう一つ「不死の  
薬」だつたという。「壷なる御薬た  
てまつれ」と言う天人は、なお言葉  
をついで、「地上では」きたない物  
分が悪いことでしょう、と。

さて、かぐや姫を天上から迎えに  
来た天人のもたらしたものは、「天  
の羽衣」のほかにもう一つ「不死の  
薬」だつたという。「壷なる御薬た  
てまつれ」と言う天人は、なお言葉  
をついで、「地上では」きたない物  
分が悪いことでしょう、と。

月7日付)。奈良に住んだ民俗学者  
の笛谷良造は、「中秋の名月の宵に  
麥若水(をちみづ)と呼ぶ聖水が月  
の世界からやつて来る、という信仰  
が各地に残っているのだ」と言う  
(『神々の世界』)。

また、『万葉集』の巻十三には次  
のようないい歌がある。  
「天橋も長くもがも 高山も高く

もがも 月夜見(つくよみ)の持て  
る麦若水(をちみづ)い取り来て  
君にまつり をも得しむもの」(三三四五)。  
折口信夫もまた、前回に引いた武  
田祐吉の神仙説を承(う)けて、こ  
の「をちみづ」は月中にあつて、飲  
めば若くなる不思議な水であるとし  
ている(全集⑪『万葉集辞典』)。

一方、野口元大のように、上掲の  
田祐吉の神仙説を承(う)けて、こ  
の「をちみづ」は月中にあつて、飲  
めば若くなる不思議な水であるとし  
ている(全集⑪『万葉集辞典』)。

古島に「をちみづ」の話として形を  
変えて伝承されている。その話の大  
意はこうだ。  
「むかし昔、日月の神が地上に使  
いをつかわせて、人には、復活と長  
命の「をちみづ」を、蛇には「死に  
みづ」を与えよと  
命じた。ところが、  
一匹の大蛇が現れ  
て水おけから、人間に浴びせるべき  
水をかぶつてしまつたので、使者は  
しかたなく残つた「死にみづ」をか  
げざるを得なくなる。そんなことで、  
人間に不死を恵む月の慈悲も虚しく  
なつたが、神はそれを憐れみ、この  
時以来毎年の祭りの宵へ節祭(しつ)  
の新夜(あらゆ)々に若水を送るよ  
うになつた」

という。折口もまた、ネフスキーの  
示唆を受けて、正月に若水を汲むの  
は、復活と転生を願う信仰のあかし  
だ、と述べている(「若水の話」)。

物語は、この場面を「きと影にな  
りぬ」と記している。注釈書の一つ  
に、「きゅうに影のようになつ  
て……」とも、あるいは、「キトは、  
急に之意。ここは光線で見えなくな  
つたことをいふ」(武田祐吉)とさ  
れる。

しかし筆者には、この世の人なら  
ぬ姫の強い本性のうちに、秘めら  
れた人界への愛おしさのような思い  
として、受け止めたい気持ちがある。  
終段に至つて、天人がさつと天の羽  
衣を姫に着せると、姫には翁を「い  
とほし、かなし」と思う心もなくな  
り、天に昇つてしまつというだけ  
は、何とも切ない話ではないか。

そうは思いつつも、「月の都の人にて父母あり。片時  
の間とて、かの国よりまうで来しか  
ども……。かの国の父母のことも覺  
えず、ここには、かく久しく遊びき  
こえて、慣(な)らひたてまつれり。  
いみじからむ心地もせず、悲しくの  
みある」と「小さ子」の頃より育て  
てくれた「翁嫗」ともともにい  
みじう泣く」

おはしまさず、変化の者なり、天人  
のぐだりてうみたまへりなり」とあ  
れるように、今年もまた間近くなっ  
た中秋の月を待つてゐる。

(にしむらひろみ)詩人・奈良民  
俗文化研究所研究員

万葉歌以外にも見られる月と復活あるいは不老不死の観念は、著しく中國的発想に学んでの作であつて、月と女性とが結びついた例は皆無だ、とする指摘もある。

▼ネフスキーの「月と不死」

柳田國男や折口信夫とも深い親交のある東洋学者

「光と影のかぐや姫」「なよ竹のかぐや姫」と呼ばれた姫は、その名のとおり、光り輝くほどに美しくキラキラとした娘だった。しかし、育ての翁が言うように「變化(へんげ)の人」でもあった。變化とは、神仏の化身として、仮に

この世に現れたものとを言う。

『宇津保物語』には、「ただ人に

おはしまさず、変化の者なり、天人  
のぐだりてうみたまへりなり」とあ  
れるように、今年もまた間近くなっ  
た中秋の月を待つてゐる。

(にしむらひろみ)詩人・奈良民  
俗文化研究所研究員